

2020. 10. 18. 聖霊降臨節第21主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書14章15-24節

『神の招きに応える』

今日の聖書箇所は、先週に引き続き、招待、招きということがテーマになった「たとえ」です。招きということがこうしてたびたび語られるということ、それは聖書の根本のメッセージが招きということと深くつながっているからでしょう。

招待、招かれるということは小さな子どもでも感じる喜びです。幼稚園に通う子どもも、友だちの誕生会に呼ばれて、うれしくて楽しみで、わくわくという気持ちになります。小学生の子が、好きな異性の子の誕生会に呼ばれたら、どんなにルンルンするか。大学の合格通知や会社の採用通知が招待状のように感じられた、という人もいるかもしれません。しかし一方で、わたしたちは次第に招きということに鈍感になっていったり、招かれていることが煩わしくなったり、めんどくさくなったりすることもあります。にもかかわらず、招待、招かれるということは、人間の深いところに響いてくるものがあるのです。

15節「食事を共にしていた客の一人は、これを聞いて、イエスに、『神の国で食事をする人はなんと幸いなことでしょう』といった」。

先週の聖書箇所から続いている食卓での話です。だからこの客の一人というのは、ファリサイ派の人と考えられます。主イエスは先週のたとえで、宴会に招く主人の話をしました。その話を聞いてファリサイ派の人は神の国の宴会に招かれる人はなんと幸いなんでしょ、といったわけです。

しかしここには含みがあり、ファリサイ派は、当然自分たちは招かれるという前提でこの話をしたのです。招かれる自負があったのです。いやもう招かれている。だからこの発言は自分たちは幸いなものだ、という優越感が見え隠れするような発言だったのです。

この発言に対して、主イエスは「たとえ」を語られたのです。この「たとえ」は先週同様、神の国のたとえ、神の国を指し示すたとえです。

ある人が盛大な宴会を催そうとして大勢の人を招いたのです。宴会の時間が近づいたので、僕を送り、準備が整ったのでおいでください、と丁寧にも再度のお招きを知らせたのです。ところが招かれた人々は、次々とその日その時になって断ったのです。ある人は畑を買ったので、見に行かなければならないと言い、ある人は牛を買ったので、それを見に行かなければならないと言い、別の人は新婚早々なので、行くことができないと言って断ったのです。

この断りの理由をどう見るか、ということは人によりさまざまでしょう。しかし、いずれにせよこの人たちは、招かれたその日に、招きを断ったのです。

僕は帰って直ちに主人にそのことを報告しました。すると主人は怒って、僕に命じたのです。「急いで町の広場や路地へ出ていき、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れてきなさい」僕は主人の言う通りにしました。しかしまだ席が空いていたので、そのことも主人に伝えました。すると主人は「通りや小道に出ていき、無理にでも人々を連れてきて、この家をいっぱいにしてくれ」。ものすごい招き方、というか、普通には全く考えられない招き方です。

ここは今度の新しい聖書を見ると最初に町の広場や路地へ出ていき、というところは「町の大通りや路地へ出て行き」とあり、次には「街道や農地へ出て行って」とあります。最初は町の大通りで人を呼ぶ、次には街道まで出て行って、路地から農地へとどんどん広がっていくのです。こんな招き方があるか、というような招き方です。

主イエスはなぜ、このような「たとえ」を、この場面で語られたのでしょうか。先週も申し上げたように、主イエスの「たとえ」はその多くが神の国を指し示す、神の国の「たとえ」なのです。しかもその場合、「たとえ」というのは、何かをわかりやすくするために語られるのではなく、聞いているものにあれこれ考えさせ、揺さぶり、覚醒しようとするものだ、ということをお知らせしてきました。

この招き方は、招きとしては尋常ではない。普通ではないのです。普通であれば、招いていた人たちが当日になってあれこれ理由をつけて断ってきたら、怒りもするし、がっかりもしますが、だからと言って見ず知らずのような人は呼びません。見ず知らずの人を誰かれ構わず、自分の心を込めた宴会には招かない。それが普通です。極端な表現をすれば、実際こんな招き方をしたら、気

がふれた、頭おかしくなった、狂気の沙汰だと言われかねない。それがこのたとえの異和感、常ならぬ部分、「異常」な部分です。そしてそれが神の国を指し示している部分です。

神の招きは驚くべき招きなのです。この主の「たとえ」から受け取らなければならないことの中にはこのことです。神の招きはわたしたちの想像をはるかに超え、常識を超えているのです。さらに踏み込んでいえば、神の招きに私たちの理屈など全く通用しない、ということです。この神の招きに私たちの言葉でもっともらしい理屈をつけるべきではない、ということです。神の愛と招きはこの人ならふさわしいという枠を超えて、誰にでも広がっていくものなのである、というのはわたしたちがつけた理屈です。そうした理屈ではなく、この「たとえ」で大事なことは、この神の尋常ならざる招きの前で驚くことそのものなのです。なんとという招きなんだ、と驚くことなのです。

わたしは神の招きにはふさわしくない、と真顔で言う人がいます。自分で判断したのでしょうか。しかしこのたとえに聞く限り、自分でどのように判断しようとそんなことは神の知ったことではない、神には神のご自由なお考えと判断とがあり、あの人は招かないだろう、と人が判断することに対してもまったく自由に招かれる。

そうであればこそ、招きということで、わたしたちが知っておくべきことがあります。それは、このたとえで指し示される神の招きは、わたしたちのうちに根拠を全く持っていないということです。わたしの持っている何か、身につけている何か、わたしが自分の信仰だと思っている何か、そういうものが根拠となってわたしが招かれるのではない、ということです。それが町の大通りや路地に行って、街道や農地に行って無理にでも連れてきなさい、という不思議な言葉が表しているものです。手当たり次第に誰かれ構わず、とわたしたちには見える招き方、わたしたちの中のルールなど全く関係ない、神の自由な恵みの招きなのです。そこを歩いていた人がどういう人なのか、わたしたちにはわからない。神の招きとはそういうものだ、ということです。

なぜわたしが神の恵みにあずかる招きの中に入れられたのか、わからない、ということです。少なくともわたしの中の何か理由ではないのです。わたし

は神の招きにはふさわしくない、という自己判断はここでは全く根拠を持たない。けれどここには、招かずにはおられない、という主人の強い意思があふれています。

ファリサイ派の人は、自分たちは正しい信仰生活を送っているから、当然招かれる、いやもうすでに招かれているという自負があった。だが、それは全く誤解。なぜなら神の招きは、招かれる理由がわたしたちの側にない、根拠がないからです。主イエスはそのことを示されたうえで、しかし神は全くの自由な意思で、わたしたちを招かれる、ということ語っているのです。一方で、招かれながらも招きを断った人たちがいるのです。この人たちは初めから全く拒否ではなく、受けていたけれど間際に断った、という人たちです。宴会の席につかなくなった人たちは。喜びの席につかなくなった。この宴会がどれほど豊かな、祝福にあふれた宴会であるかは出席してみなければわからない。彼らはその機会を自分から放棄してしまった。他方、通りに歩いていて強引に連れてこられた人たち、この人たちはわけがわからないままに宴会に足を踏み入れたのです。つまり大事なことは、人間の側の理由などではなく、とにかく席について、直接自分の口で食事をし、その味を楽しみ味わうこと。更にはその宴会の豊かさ、楽しさ、自分自身で味わうことなのです。誰が招かれる資格があるとか、あの人は招かれる資格がないというようなこちらの理屈を振り回す必要は全くない。大事なことは招かれていることを受け止めて、神の宴に参加することです。その食事は、み言葉に聞いて、自分の体で味わい、最後の料理まで自分の口で味わう、み言葉の豊かさ深さを十二分に味わい、知ること、に通じます。

当日になって様々な理由で招きを断った人たちの姿は、不思議に胸にこたえるのです。これほど大きな喜びの宴に招かれているのに、断ってしまう。わたしたちの人生でもしばしばあることです。他人事ではない。

しかしそれでも、わたしたちは招き続けてくださる神に、今日応えて、今日その席に着くことの赦されている大事さと喜びをかみしめていきたいと思うのです。